地学と切手

スルツェイ
火山噴火切手

P. Q.

アイスランドは　中央大西洋海嶺の上にあって　北海道と九州を合わせたくらいの面積に　約19万の人口が住み　全島がほとんど熔岩からなり　活火山も多い．1963年から67年にかけて南の海深130m の所で N35°E 方向の 300～400m の割れ目から噴火が起こり　島ができた．　これを記念して３枚１組多色刷の切手が1965年６月23日に発行された．　切手は噴火の始った63年11月から　64年４月　64年９月の３枚である．

1963年11月14日の朝　付近で操業していた漁船員が硫黄の臭に気付き　７時には船長が火山活動を確認した時には黒煙が上っていた．　煙はやがて12,000フィートにも上るようになり　11時に火山学者のソラリンソンが到着した時には　N35°E方向の 1,000～1,300 フィート離れた２ヵ所から上っていた．　島は翌15日夜に生れた．それから12月末まで　噴火は間隔を次第に広げながら続き　島は次第に成長して行った．　噴火は海底噴火に特有な明神礁の噴火の形態をとり　火山灰と水蒸気を放出した．

島への最初の上陸は３人の生命知らずのフランス人週刊紙パリマッチの特派員により12月６日行なわれた．彼らは快速艇を利用し15分間の滞在に成功した．　そこで政府は島に名前をつけることになり委員会が組織され神話の巨人Surturにちなんで Surtsey と命名された．しかし付近の島　ヴェストマン島の住民は　島の命名権は自分たちにあると考え　Vesturey（西の島）の名前をつけ島に標識を建てようと12月13日に上陸したが　折からの爆発にあってようやく逃げ帰った．　科学者の最初の上陸は 12 月 16 日行なわれ　その際の岩石の分析から $SiO_2$46.5%のアルカリ橄欖石玄武岩であることが判明した．

12月29日　スルツェイの 1.5 マイル北東に 820 フィートの長さの割れ目噴火があったが　島ができるに至らなかった．

1964年１月は時折の噴火があり月末には島の高さは 570 フィートに達した．

２月２日に新しい火口が最初の火口の西側にでき　活発な活動を始め　最初の火口は休止した．島は４月までに 5,600 フィートの長さに達した．　２月19日に７人の科学者が島の北西岸に上陸したが数分しかおられなかった．

４月４日　熔岩の流出が始った．　直径 400 フィートの熔岩湖から秒速65フィートで流れ　海に向って滝になって入って行った．　４月22日に熔岩の流出は極限に達し　29日まで続いた．　切手の１枚はこの時点を示している．　一時中断した熔岩流出は７月９日再開され　65年４月まで続いた．　熔岩は数十の滝となって海に落ちる．　熔岩錐のスロープの裾野から地上に出たり　海の近くで出たりする．　海岸の崖の下から出る熔岩流もあった．　３枚目の切手はこの様子を現わしている．

65年５月22日に北東東の近くに水蒸気が上った．　この噴火は11月まで３回にわたって島を出没させた．　島は Syrtlingur（小さい Surtur）と名付けられたが　この島は噴出物の SiO_2 は　最初のスルツェイのそれよりも２%低かった．

12月26日から１マイル南西に別の島ができ　66年６月まで６回出没をくり返した．

スルツェイの噴火は　期間の長さではアイスランド史上２番目の長さになる．　島には1964年４月にセスナが着陸するようになり　ヘリコプターがしばしば訪れ　65年１月には双発機が着陸するようになった．　アイスランド政府はこの島を動植物・地質についての科学的観察の場とするため65年５月に聖域の宣言を行ない Surtsey Research Society が組織され Surtsey Research Progress Report が遂年発行されている．

終局にはスルツェイ島の面積は　2.8km^2　最高点 173 m　噴出物は約1.1km^3　うち 0.7km^3 はパホイホイ熔岩流・ハイアロクラスタイト・枕状熔岩で 0.4km^3 は海水との接触による水蒸気爆発の放出物である．

その後1973年には北東延長上のヴェストマン群島のヘイマエイ島で割れ目噴火が起こり　住民が避難しなければならない事態が生じたのは　よく知られている．